
第二次大東亜戦争1部「日本本土防衛！」

瑞鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第二次大東亜戦争1部「日本本土防衛！」

【Nコード】

N1455H

【作者名】

瑞鶴

【あらすじ】

2009年…アジアは大きく動く。そして平凡な生活を送っていた一人の少女はこの事態に大きくかわる事になる…北朝鮮の暴走…中国・韓国に超親北政権誕生。ソ連共産党残党によりロシア崩壊。そしてこの四国は日本に宣戦布告。この事態を予想していた日本は憲法の作りなおしと軍の設立、反日政党&団体解体などを行い来る決戦への準備は整ったが相手は四国、アメリカはまだ動かず口くなしな同盟国もない日本はどうなるのか？

プロローグ（前書き）

始めまして

やたら危なっかしいネタもあるけど
嫌いじゃなかったら読んでね

あとちょっとミリタリー知識がないと面白くない
部分もあるかもしれません。

それからちょっと残酷かもしれませんので
ご注意ください。

ブローグ

平凡な生活を送っていた一人の少女を取り巻く戦争…

北朝鮮の暴走…

韓国・中国に親北政権誕生…

ソ連共産党のクーデターでロシアが倒され第二ソビエト連邦誕生…

これに対抗すべく憲法は新たに作られ自衛隊は陸海軍、それに属する航空隊による

国防の為の軍隊「日本国防軍」となりいつでも戦闘可能になった。

しかし準備は整っても相手は四国、アメリカはまだ動かない。

ロクな同盟国もなし。

はたしてこの危機を日本はどう乗り越えるか？

つー話です

それは突然の攻撃であつた

…

カーテンの合間から朝日が彼女を照らす…

気持ちのいい朝です。

背伸びをしカーテンをあけ目を浴びる、この少女は今日から高校生の
「中根麻衣」

麻衣は部屋から出て階段を下りると家族が待っていた。

「おはよう麻衣」

「おはようお母さん」

そいつもの日常が始まるうとしていた」

「おお麻衣！ 今日はずいじゃないか！」

「もうお父さんたら…いつまでも親に起こされてる私じゃないの！」

ほんとうに平和だった…家は。

実はこのアジアの情勢は大きく動いていた。

北朝鮮の暴走

中国、韓国に工作の影響で超親北政府誕生。

ロシアがソ連共産党残党のせいで崩壊、第二ソビエト連邦誕生。

将来誓いであろう戦争に備え日本も憲法を新たに作りなおし「日本国防軍」と

国防省、軍需省、陸軍省、海軍省、空軍省などの軍に関する省が設置される。

だがそんな事、麻衣にとってはどうでもいい事だった。

学校 -

「おう！麻衣また同じクラスだねっ！」

「うん！高校でもよろしくね！」

麻衣に親しげに話し掛ける彼女は細川澪、語尾をやたら強調しやらボーイッシュ শু だけど

どこかわい、父親はかつての自衛隊でもお偉いさんで今は日本海軍の中将だ。

実はこの高校にギリギリで入学したため先が心配でもある。

彼女と過ごすのはなにか楽しい、馬鹿っぽいけど…

ちなみに麻衣や澪が住むこの町は札幌という北海道の都市である。

その札幌の真駒内というあたりである。

ここは札幌オリンピックなどで使用された真駒内屋外競技場などがあり

またここにはかつて自衛隊の旅団の基地があつたが軍に格上げされまたロシア軍がせめて来ることも想定し第11師団に格上げされる。

もつともこの第11師団は元々師団であつたが規模が縮小され旅団

となった。

だが緊張がたかまるこの辺の情勢から再び師団に格上げされ兵員も以前の師団と時よりも大幅に増やされた。

学校が終わり麻衣たちは下校する。

ガアアアア

日本軍の装甲車、輸送車が沢山走っていく

「すごいね、こんなに沢山走ってる所みたことないぜっ！」

「ホント物騒な世の中になったね」

「えっ？麻衣はあーゆーのみて安心しないのか？」

「あたりまえでしょ 貴女はお父さんが軍人だから仕方ないけど私はこーゆーのあまり好きじゃないの」

ゴオオオオオオオオ

今度は空軍の飛行機が飛んでいく。

「おおっ！ 今度は日本空軍だ！ あれはF2支援戦闘機！ あっちはF15だよっ！」

「はいはいよかったねえ」

麻衣は興味がなかった、感激している澪にあきれていた。

しかしこれだけ毎日軍が活発に動いていると
流石の麻衣も心配になったのである。

「それにしてもここの所ずっと日本の戦闘機とか空飛んでるし戦車
も走ってるし

近時期なにかあるのかな？」

「なにかあるもないも北朝鮮や中国、韓国、そしてソ連と戦争にな
るかも

しれないんだよ？ 特にこの辺は敵にとって戦略上重要そうだからなっ！」

「それって戦争になったら私たちが犠牲になる可能性高いじゃん！」

「心配するなつて！ その為にお国が、軍ががんばってるんだろ？」

澪は成績こそ悪いがこういう知識だけはほかの人より詳しいのであ
った。

：というのも育った環境もあるのだろう。

麻衣は澪の友達だがこればかりはどうも話しについていけないので
あった。

お互い家が近づいてきた頃澪はこういった。

「そうだ麻衣！ 今日午後暇だろ？」

「うん、澪どしたの？」

「街中遊びにいこうよお！」

「うゝん、ここの所勉強ばかりで疲れたたまには気晴らしという
ことで行こうか、

いいよ！ 1時半自衛隊前駅集合ね」

陸軍師団前駅というのは地下鉄南北線の駅、以前は自衛隊前駅という名前

であったが軍になったことと旅団から師団に格上げされたことがきっかけで

こう改称された、文字通り近くに日本陸軍第11師団が駐屯する真駒内駐屯地がある。

彼女たちの家からはこの陸軍師団前駅が最寄の駅である。

中根家 -

「ただいまー」

中根家は共働きで母は7時まで帰ってこない。

家には麻衣の妹で今年から中学生の「愛」がいた。

「お姉ちゃんお帰り！」

「いい愛、私昼ご飯食べたらず友達と遊びに行くからお留守番よろしくね」

「わかったよ」

いつまでも子ども扱いするなよ… って目でみながらそう愛は答えた。そして昼ご飯を食べ終わったあと麻衣は即着替えて駅へ向かう。

駅にはすでに濡がいたが定刻だったので特に問題なし、地下鉄のとりあえず札幌駅へ向かう。

札幌駅 -

札幌駅はどこから駅なのか迷うくらい店が沢山である。
彼女たちはとりあえず服屋へ行った。

「これかわいいー、買ってくれよ麻衣い」

「あんたにしては女の子っぽい服ね…自分お金で買いなさい」

「けちい」

「ケチじゃありません 普通です」

麻衣は保護者のようにこう言ったのだった。

その後どっかの店で買ったまだあったかいから揚げを食べながら南口付近を歩いていた。

「いやあ！ 札幌もかわらないねっ！」

「いや変わったから…」Rタワーなんてなかったでしょ」

「いやあ…たしかにそうだけどな ははは」

楽しそうに話をしていると上空にわりと大きな飛行機が飛んできた。
音からしてプロペラ機だ。

「なにあれ？」

その飛行機は何かを投下…その投下物は落下しそして爆発した。

そう爆弾であった。

人々は叫ぶ…

「きゃー！！！！！！」

「なんじゃありゃあ！！！！！！」

麻衣もびっくりであつた

「うそ…だよな？」

まさか地元札幌が攻撃されるとは…はたして麻衣達の運命は？

それは突然の攻撃であつた（後書き）

ちなみに札幌を攻撃したこの爆撃機は
ロシア軍のTu-95という飛行機でソ連時代に開発された
プロペラ機です。
現在も現役です。

ソ連軍北海道上陸！

ドゴアアアアアアン！

ドゴオオオオオオン！！！！

バゴアオオオオオオアアオオオン！！

爆弾が次々と投下されそれま建っていた建物は次々破壊され
それまで生きていた人々は世代、性別など関係なしに死んでゆく。

「空襲よ！地下に隠れるのよ！！！！」

一人の老婆が叫ぶ、きっとその老婆は戦争の記憶が蘇ったのだろう。
どうしていいかわからない麻衣はとりあえずその老婆に従った。

逃げ惑う札幌市民の中には爆撃機に投石するものもいたがあたるわけ
もないし第一

そこまで届くわけもない。

札幌駅周辺にかなりの被害がでたところに日本空軍の戦闘機がやって
きた。

千歳から飛びたち今ようやく迎撃にきたのだった。

同じ飛行機とて爆撃機と戦闘機では差がありすぎる、
敵の爆撃機は次々と撃墜されていく。

しかし敵の爆撃機はジェット機でないためミサイルが使えない。
新米パイロットも中にはいたらしく一機が火を噴いて下に落ちてい

く。

…といつてもパイロットは脱出し無事生還できた。

麻衣たちは安心した…と思った次の瞬間最後の一機が麻衣たちがいる近くに爆弾を投下した。

「きゃっ!!」

しかしその一機も戦闘機に撃墜され敵の爆撃隊は全滅した。

しかし札幌市が受けた被害は深刻だった。

まずJR札幌駅が壊滅的なダメージをうけJRはまともに列車を運行できなくなった。

JRタワーなどの建物も破壊され札幌市中心部は大損害をうけた。

麻衣は気がついたら瓦礫の中にいた…と言っても結構スペースはありほかにも倒れている人がいた。

「助かったの…?」

手を右におくと誰かの手に触れた。

「誰?」

声をかけても動かない

麻衣は特に部活はやってなかったが2年前まで空手をやっていたため体力も力もあった。

かけつけてきた強そうなおっさんと一緒に瓦礫を持ち上げると倒れていたのは
漣だった。

「み…お？…漣！　しっかりして漣！！」

しかし返答はない。

その後漣の死亡は確定した。

それから一週間後…死者は10万人以上、負傷者は8万人が確認された。

麻衣の学校でも何人かが亡くなり近所の方々も数人がなくなった。
父は生還したものの全治1ヶ月の重症を負った。

またこの一週間の間に稚内、留萌、函館、青森、秋田、新潟などの
都市が爆撃された。

さらに東京にもミサイルが数発落された。

この日は北朝鮮がミサイルを発射しそれを軍が迎撃した次の日だ。
まさか翌日の時点ですでに戦いが始まっているとは…

麻衣は大事な友達を一人失いまた近所の親しい人も数人失い
父は大怪我をした。

麻衣の気持ちは悲しみから次第に怒りへとかわっていった。

ある日の事だった…

「お母さん」

「なに？ 麻衣？」

麻衣はこう母に訊いた。

「軍って女の子も入れるの？」

「あなたまさか軍人になって戦おうって言うんじゃないよね？」

「そうよ、隣や近所の人やお父さんの仇よ！」

「まちなさい！ 貴方はまだ15歳でしょ、今は勉強のほうが優先だし」

私も母として娘を戦地に送り出したくはないの！」

「お父さんも心配するよ！」

「それでも私は戦う！」

これ以上誰も死なせたくないの！」

戦後の教育を受けその通りだと思っていた麻衣からは信じられない発言であった。

彼女にとって大切な人が死んだ、もうその光景を見たくない彼女の心には「守りたい」という

ものだけである。

数時間ほどの言い争いの末母は納得した。

だがまだ年齢が幼いのだと思った、そう国防軍は16歳から志願兵として軍人にな

れるのであった。

しかし麻衣は

「それでも！ 私は守りたいの！」

これほど真剣な娘の姿は始めてだった。

そんな話をしていたら衝撃的なニュースが報じられた。

「陸軍省より臨時ニュースを申し上げます、ソ連軍が石狩新港から上陸、

現在我が軍と交戦中であります。」

なんとソ連軍が上陸してきたのであった、石狩以外にも稚内、根室などにも上陸を開始した。

ブオオオオオオオ

一週間前：聞いたばかりのあの嫌な音が聞こえた。

麻衣の家かせも見えた、爆撃機が近所の真駒内駐屯地を爆撃している。

さらにソ連軍は住宅地にも爆撃を開始した。

時は4月13日、「ソ連軍北海道上陸開始」

一方軍でもソ連軍を撃退する作戦が考えられていた。

真駒内駐屯地地下壕 -

師団長高野隆中將は地下壕にこもり部下とともにソ連撃退作戦を考えていた。

「今まさに我々の防衛担当区域に敵軍がせめて来た、
従って我が師団がこのあたりで先陣をきって戦わなければなら
ない」

高野隆中將は陸上自衛隊時代からの將軍で

実戦は始めてであるが冷静であるが心優しく部下からも親しまれている將軍である。

「今空軍から連絡が入った、すべての敵爆撃機を撃墜したとの事だ。あとは石狩の歩兵と砲兵を主力とした大隊が我々が行動につつまで

持ちこたえられるかだ」

そういった後高野中將は地下壕から出て地上に上がった。

空軍の活躍で思ったほどの被害ではなかったものの戦車8両、死者1890名などやはり損害は大きかった。

「いくら本州から増援されたとはいえ残り32両の戦車と6000名の歩兵で

なんとかかなりますかね？」

「恐らく厳しいだろう、さらに援軍を要請しよう」

一方稚内、根室は札幌以上の激戦が繰り広げられていた。

ソ連軍の猛攻と奇襲により稚内市街地が陥落、北の前線は南稚内となった。

根室半島も一部が敵の手に堕ちるといふ、日本軍は体勢を立て直し反抗に移れるのか？

その頃麻衣は空軍に志願、幼いが今はパイロットが必要と考えた軍は麻衣を採用。

これからパイロットとしての訓練が行われる事になる。

麻衣は一人前のパイロットになれるのか？
そして北海道の戦いの行方は？ 日本の運命は？

ソ連軍北海道上陸！（後書き）

ちよつと唐突だったかな？

ちなみに破壊された戦車のほとんどは74式戦車という裏設定です、90式戦車じゃなくてよかったです。

北区石狩川攻防戦【前編】

4月18日には石狩を突破され4月20日南稚内が陥落した。
占領された地域の人たちは虐殺されていた。

肉を剥がされ爪を剥がれ眼球をとられたり引きちぎられたり戦車に
踏み潰されたりと
ひどい有様だった。

4月23日ソ連軍は札幌市北区に侵攻する。
だがそれを食い止める為一人の将軍がたちあがった。

それが高野隆中将である。

「師団の全兵力を駆使し敵を撃滅する！」

90式戦車 74式戦車などの主力戦車を主力とする第11戦車大
隊、

歩兵を主力とした第18普歩兵連隊、それらを支援する第11後方
支援連隊などを主力とし

さらに別の部隊からの援軍により歩兵約12000人 戦車60台
などが真駒内駐屯地と

その他空襲により空き地となった土地に集結した。

第11師団は札幌防衛の為北区の石狩川へと軍を進めた。
そして石狩川で両軍は衝突した。

第11師団（援軍含む） v s ソ連軍

歩兵12000 歩兵20000

戦車60 戦車100

装甲車48 装甲車60

ヘリ20機 航空機80

など

+

空軍22機

兵力からして日本軍は不利であった。

「中将、状況報告です」

「現在我が軍は使用兵器の性能で敵軍を圧倒しておりますが
それもあと僅かの期間となる可能性がたかいです」

「ソ連軍はさらなる援軍があるものと思えます、消耗戦となれば
我が軍に勝ち目はありません」

「うーん、現在の挟み込み作戦の効果もなくなる時が迫っていると
の事だな」

「はい」

「北海道は海軍力に欠ける、余市防備隊も兵力が不足しているらしく
ソ連の太平洋艦隊に太刀打ちできるかが問題だ」

「まさか…北海道が陥落するんじゃない？」

「ハハツ なにを言うか、相手はただでさえ金のないロシアがふたび赤化した」

第二ソビエト連邦だ、我々が持ちこたえれば勢いはなくなるだろう」

「そう簡単にいきますかね？」

「もちろん今のはジョークだ、ハッキリ言ってソ連は物が多い。だが日本は負けない」

一方日本空軍では -

「くっ…っう！」

「がんばれ、Gに耐えられなければ戦闘機乗りにはなれない」

麻衣は戦闘機乗りになるため必死であった。
愛する者を守る為に…

「はあ…はあ　ところで山梨さん？」

「なんだね？」

山梨とは空軍の教官である。

「一人前になるには何ヶ月ですか？」

「ハッキリ言えば一月なんぞで一人前にはなれない、最低でも五年だ」

「…お…五年!？」

「そうさ、五年だ」

一般的に一人前のパイロットになるには5年はかかる。麻衣は不安になった、自分は実戦に間に合うかが。

その後も厳しい訓練が日々続いた。

一方地上ではタカの中将の巧みな戦法で

ソ連軍は石狩川を超える事ができなかった。

一方で日本軍もその先から進軍することはできなかった。

完全な消耗戦となってしまうたのであった。

しかしソ連軍爆撃隊が第11師団の戦力低下を狙い襲撃してきたのであった。

その数は100を超えていた。

第2航空団司令官尾上定正

「まずいな、現役パイロットだけではたりないぞ…」

「戦力の大半を中韓北が攻めてくるであろう日本海側の基地にもってかれちゃいましたからね、予備の航空機を操縦するパイロットがいません」

「あまり手段としては好ましくないが…訓練生も戦闘に出すほかない」

「しかし彼らは！」

「これは戦争だ、たしかに貴重なパイロットを失いたくはない、

だが陸軍がやられてしまえば北海道はおしまいだろう」

「…」

「…」

「仕方ない、それにほかの航空隊だったそうするだろう」

尾上はやむをえず訓練生を実戦に出すことにした。

その中には軍歴僅か2ヶ月の麻衣もいた。

「うそ…私なんてまだロクに飛行機も操縦できなくて…」

「心配するな、俺の言うとおりにすればどんな素人も操縦できるはずだ」

2ヶ月という期間は早すぎるかつロクに操縦もできない。

訓練生が実戦にでたというのはどこの軍隊でもある話だが飛行時間が1時間未満の

麻衣のようなパイロットは飛ぶだけで非常に危険である。

（最もこのような者はまだ飛行機に乗れないのだが）

しかし麻衣には自分に知らない力があつた。

それは曾祖父が残した力だった。

操縦桿を握った瞬間、麻衣にはなにかが伝わった。

「なにこれ？ 触った事もないし操縦方法もちょっと教わっただけなのに…」

なんだか今なら飛ばせそう…」

そう言つと山梨教官から無線が入る

「全機出撃だ、私の機体続け！」

山梨は教官もしているが実戦にも参加できるベテランであった。
そして山梨自身もある力を持っていた。

ゴオオオオオオオオ

ジェットエンジンが響く。

「すごい…始めてなのに操縦できた！」

麻衣は触ったこともないF-15戦闘機を操縦できたのだった。

山梨の能力は人に眠る能力を見抜けることだ。

これは彼の祖父の能力であった。

彼の祖父はあまり有名ではないが零戦で86機も撃墜した撃墜王であつたと同時に

若い奴の能力を見抜きすごいと言つた奴はみな10機以上撃墜した。

その能力が山梨に遺伝したのであろう、山梨は麻衣を「すごい奴」と見抜いたのだ。

しかし麻衣自身そんな事には気づきもせずまたなんのこともわからない。

しかし今麻衣は笑っている、戦時中であつても麻衣は笑っている。
そう、守る為の一步「飛ぶ」事に成功したのだった。

北区石狩川攻防戦【前編】（後書き）

ご感想等お待ちしております

北区石狩川攻防戦【後編】

なぜだろう？

初めての飛行で見事にF-15を操縦する麻衣。

しばらく飛行しているとやけに都会になってきた、そして次第に街は荒れていった。

そう、空襲で市街地がほぼ壊滅してしまった札幌だ。大通公園には難民が集まっているらしい。

また食糧確保の為市民同士で殺し合いが行われていた。道庁も市役所も被害を受けた札幌は荒れ放題だった。

それどころか道庁もぶっ壊れてしまったので道内も混乱状態だった。

自分の故郷がこんなになってしまった様子を見て麻衣は涙すら流していた。

涙をふき真剣な顔になった瞬間山梨機から無線がはいる

「敵は護衛戦闘機も連れている、気をつけろ！

あと地対空ミサイルにも注意するんだ！

わかっていると思うが回避にはフレアを撒くんだ！」

どうやら敵の爆撃隊は護衛戦闘機もつけているらしい。

初飛行にして初陣にしてさらに初めての戦闘機vs戦闘機の空中戦を体験することに

なってしまった、麻衣にとっては不利である。

とりあえずは山梨に返答する。

「はい！」

地上を見ると大激戦であつた。

しかし日本側の損害が目立つようになっていた。

なぜなら爆撃隊の攻撃はすでに始まっていた。

地上の91式携帯地对空誘導弾も多少やくになっているものの効果はあまりない。

現在日本軍は戦力を北に集結させようとしており北海道・東北の戦力を札幌、稚内、根室へと送り始めた。

援軍がくるまで予想ではあと3日ほどである。

しかしこのまま空からの攻撃が続けば3日もたたずに第11師団は壊滅してしまう。

そこで航空兵力による援護が必要なのである。

麻衣はまず索敵を開始した

「うーん」

「見つけた！」

護衛の戦闘機はsu-27、

ソ連が設計、開発しソ連をはじめとした各国で運用されている戦闘機だ。

ソ連の戦闘機としては高性能でうまい人が乗ればF-15ともまともに戦えるらしい。

「なにあれ！？　新しい戦闘機？」

麻衣は軍人でもそういった事は無知であるため敵の戦闘機がなにであるかわからなかった。

「気をつける中根！　ソ連はパイロットに鬼訓練をしているらしい。根性でこちらと互角に戦うかもしれないぞ！」

実際にsu-27とF-15は模擬空戦で戦いsu-27が勝った……という話があるが
これは虚偽であるとの情報があり確かではない。
ただし強い機体であることにはかわりない。

麻衣はとりあえず右旋回を行う

「……」

アッサリと敵の後ろにつくことができた
「なんで？　なんで私がこんなことできるの？」

二機の戦いは激化し次第に格闘戦へとなっていた。
山梨はそれにとっても驚いたのであった。

「まさか中根の奴が初陣にして初飛行なのに敵と互角に戦っている」
「隊長！　敵戦闘機はあの8機に撤かせて我々は爆撃機を攻撃しましょう！」

敵爆撃機はプロペラ機であるためミサイルが命中しない。
そのため機関砲で攻撃するしかなかった。

隊長機は即座に爆撃機の後ろにつき巧みに敵の攻撃を交わしながら
機関砲を放ち
敵を一機撃墜。

山梨は次々と爆撃機を撃墜していく。

「御国の為に死んでくれ！」

ブオオオオオオオ

機関砲の音が鳴り響く。

一方麻衣は、

「えっ…えっと！ えい！」

ボオ！

ドガアアアン！！

「へっ？…」

敵戦闘機1機撃墜に成功したのであった。

「やつ…やったあ！」

「私にもできたよ！」

しかし！

ブオオオオ！！！！

「あっ！！！！！！」

敵の機関砲が翼に命中したのであったが…

「よかったあああたいたいだめーじゃなさそうね」

普通に飛行は可能な程度であった、空中戦をするにもなんの支障もなし。

一方地上では・

「おおお！」

「がんばれよー！」

「俺たちもいくぞー！！！」

兵士達は笑顔でその活躍を見守りそして闘志をわけてもらってた。高野中將も彼らが大空を舞う姿を見て感動していた。

「立派だ、立派であるぞ」

「空軍の活躍…我感謝する」

「皇国は永遠に不滅なり！」

「この分だとあと3日もちそうですね」

「ああ、空軍には感謝せねばならない」

・
・
・

激戦の末第11師団は3日間持ちこたえた。

4回出撃のうち損失は2機のみという、まさに精鋭パイロットがそろった空軍であった。

しかしこの戦いで惜しい男をなくしたのである。

山梨健志…享年36

敵の戦闘機数機に狙われ機体にかなりのダメージを負う。
帰還不可能と判断した彼は敵爆撃機に体当たりを行った。

彼は軍神として扱われるようになった。

一方麻衣はパイロットとしてみるみる上達していった。

5月2日、ソ連軍札幌、石狩から撤退。

5月8日、稚内から撤退

5月10日、根室から撤退

だが5月5日、ソ連、中国、北朝鮮軍が沖縄へ、5月6日韓国軍福岡に上陸。

北海道を守りぬいたぐらいでは戦争は終わるわけがなかった。

北区石狩川攻防戦【後編】（後書き）

ご意見・ご感想ありましたらお気軽にどうぞ。

一時帰宅

5月も末、戦争が激化する中麻衣に2日のみ休日を与えられた。

麻衣は一ヶ月ぶりに母に顔を見せる事になる。

ちょうどこの頃沖縄では激戦が繰り広げられアメリカ軍がようやく動き出した。

日本が攻撃されたこと、自軍の基地が攻撃されたことであろうく日米安保条約が発動した。

5月27日中国、北朝鮮、韓国、第二ソビエト連邦に宣戦布告をした。

札幌駅が破壊されている為苗穂、白石駅ですべての列車が停車するようになった。

そこから各場所への直通バスも設定された。

一時間後…

一ヶ月ぶりに見る故郷…道路に転がっていた瓦礫はなくなりまた南北線も大通までは
復旧し実質札幌市の中心路線となった。

建物の復旧作業も始まっており被害を受けた建物は建替えを行っていた。

陸軍の基地からは音楽が聞こえ兵士達が行進していた。

家に帰ると先月まではいなかった人がいた。

「麻衣、おかえり」

「お、お父さん！？ もう大丈夫なの？」

「ああ、退院していいとき、あとはたまに薬をもらいにいくだけさ」

「よかった…」

麻衣の父の怪我が完治ではないがよくなったらしく元気そうな顔で家にいた。

「あら麻衣、お父さんがいてびつくりしたでしょ？」

「もう 心配したんだから」

「ハハハッ でもお父さんも心配してたんだぞ」

「なんたつて麻衣はお国の為に大空で戦ってるらしいからな、まったく今までの麻衣からは考えられないぞ」

「だって誰も死なせたくないんだもん！」

「ハハハッ それはそうだ、俺も友人を失った、だがな麻衣、戦争は必ず一人死ぬ、しかし麻衣達の活躍があったからこそ」

北海道は今だ日本だし俺たちも生きている」

「ありがとう…お父さん…」

麻衣はともうれしかった。

またあの時市街地へ遊びに行ってから見てなかった妹の愛も何事もなく元気だった。

夜、久々に家族そろつての晩御飯。

「ところで麻衣、飛行機は操縦できそうか？」

「やだなあお父さん、もう私実戦で戦ってるんだよ」

「ハハハッ そうなのか？ お父さんもかつて航空自衛隊にいたんだが

練習機ですら乗せてくれるまで時間がかかった」

「どうやら麻衣は坂井三郎を超える撃墜王になりそうだ！」

「さかい…さぶろう？」

無論麻衣が知るはずもない。

坂井三郎とは大日本帝國海軍の撃墜王である。

戦争中盤頃からは怪我で右目の視力を失うもグラマンF6Fヘルキヤット15機と戦い

逃げ延びたり夜中真っ暗な海で何も見えない状態だというのに基地に帰還したりと

多くの伝説を残し敵を64機も撃墜した。

9年前まで存命しておられた伝説的なパイロットである。

「本当なら俺も実戦で戦いたかった

国の為に、愛する者の為に」

父は後悔気にそう言う。

「それがいきなり大怪我させられるなんて、娘は戦ってるのに情けない男だな俺って」

ちよつとしょんぼりしている。

それまで明るかった雰囲気が一気に悲壮へとかわっていく。
麻衣も気まづくなった…

「お父さん、お父さんは情けなくないよ」

「本当か？」

「お父さんが情けなかったら私お父さんを尊敬してないもん」

もちろん麻衣は昔っから父を尊敬していた、だが今はその時以上に尊敬している。

それは父が元航空自衛隊の隊員だということ、つまり麻衣の大先輩であるからだ。

「情けない人は飛行機乗りになれない、たとえ戦ってないとしてもお父さんは

すごいよ、限られた人しかねない職業についてたんだもん、
今普通の会社員だってその歴史はかわらないんだよ？」

「そうだな、よし！ 久々に食うぞ！ おかわり！」

「あんまり食べて運動しないと太りますよあなた？」

「今日ぐらいは平気だぜ！」

再び明るい雰囲気になった。

麻衣は家が大好きである。

この幸せをずっと味わいたい。

だからこそ麻衣は戦うのであった。

翌日、昼ご飯を食べた後麻衣は基地へ帰った。
今度は夏に來ると約束したのだった。

6月に入り北海道はだんだん暖かくなる頃、麻衣は再び激戦を経験する。

一時帰宅（後書き）

ご意見・ご感想ありましたらお気軽にどうぞ

野寒布沖夜戦【前編】

本日は6月23日、今日は沖縄で沖縄守備軍司令官・牛島満中将与参謀長・長勇中將が自決した日である。

中北ソ上陸から一ヶ月以上がたつが沖縄では今だ激戦が繰り広げられていた。

数で圧倒してくる中国とソ連、それを後方支援する北朝鮮。だか日米両軍は冷静さを取り戻しつつありまた援軍も到着し戦力を上げつつあった。

福岡でも九州のほとんどの戦力を福岡に集結させ大規模な反抗が行われようとしていた。

さらに準備が整い日本海軍及び米第七艦隊が日本海へ向かっていた。反抗の準備は整いつつあった。

しかし勢いを増したソ連は再び北海道占領を狙う、道北を占領すべく再び軍を

上陸させようとしたのであった。

そこで軍はそれを阻止すべく、また上陸したとしても敵の戦力を弱まらせるという

目的の為網走の隅っこにこっそりと存在する造船所で3年間かけてこっそり造船された

駆逐艦5隻、イージス艦3隻を北上させた。

さらに千歳から借り出されたパイロットと対艦攻撃に優れた

F-2 支援戦闘機により「宗谷303 攻撃隊」が編成させた。

またこの攻撃隊のパイロットの中には麻衣の姿もあった。

麻衣は空中戦はしたことがあるものの対地攻撃および対艦攻撃を行った事はなかった為

戸惑いを隠せなかった。

「…」

宗谷303 航空隊隊長中林信介少佐

「緊張しているのか？」

「はい、対艦攻撃はじめてなもので」

「そう、緊張する必要はない、第一まだ敵はこちらまで来ていないそれに君は初飛行で敵を3機撃墜したではないか？」

「でも…船って飛行機の力で沈むんですか？」

「大丈夫さ、我々の先人達はこのF-2より性能の悪い陸上攻撃機で戦闘行動中の戦艦と巡洋艦を沈めたんだ」

「もちろん敵艦はその時の船よりも強いがその分こちらも強い」

中林少佐も穏やかな人間であった

彼は沖縄の航空隊出身で所属していた航空隊では最もうまいパイロットであり実際に空中戦を行った事もある。

出生地が稚内市ということもありまた故郷が攻撃される光景をみたくないという気持ちから

宗谷303 攻撃隊の隊長に志願し沖縄から転属となった。

しかしソ連軍はなかなか攻めてこなく1日が経過したが24日になっても攻めてこなかった。

24日夜 -

「
...」

麻衣はあることに気がついた...

「ここの基地... 女子寮はないの？」

麻衣は不安だった、こんな男たちの中に一人女の子が寝る事に。
「うう... なんかされたらどうしよう...」

小声でそうつぶやくとうしろからつつかれた感じがした。

「きゃっ！」

「シート！」

「麻衣ちゃん、久しぶり」

「えっ?... 沙耶お姉ちゃん!？」

そこには彼女の近所に住んでいた三つ上の姉、上條沙耶がいた。

「そうか、麻衣ちゃんも戦うんだね」

「そんなことより私は沙耶お姉ちゃんがなんでここにいるかが知りたいよ、」

学校の先生になるんじゃないの？」

沙耶は幼い頃から学校の先生になるって張り切っていた。

「いやあその道は流石に厳しかった、あたしゃ馬鹿だからね、結局は学よりも金がほしかったから中卒でもできそうな仕事探してた」

偶然空軍の前身である航空自衛隊をみつけたんだ！」

「すごいね…普通無理でしょ中卒じゃ」

もつとも麻衣も高校に入ったとはいえ卒業はしていないので中卒ということになる。

「麻衣も中卒じゃないの？ 人生あきらめて軍人になったんじゃないの？」

「いや私はただ守りたいって思いだけで金のためじゃないし！」

「まだどうだっていいさ！ がんばろうね麻衣ちゃん！」

「あつ はい、先輩！」

「あらあら、すっかり軍人さんになっちゃって、さっきまで沙耶お姉ちゃんって呼んでたのにね、とりあえず今ここにお酒あるけど飲む？」

「えっ？ ちよっ！！待って！！ 貴女未成年でしょ！！ 私も未成年だから飲まない！！」

「んもお真面目なんだから」

久々の沙耶との会話は楽しかった。

ちよつと悪い事してそうだけど元気そうでよかったと麻衣は思った。しかしその楽しい会話を小声でしている頃であった。

「敵が押し寄せてきた、出動準備！」

ソ連軍上陸部隊が押し寄せてきたらしい。
全員出動準備を行い飛行機に乗り込んだ。
何故か基地内には荒鷲の歌が流れる。

25日午前0：21分宗谷303攻撃隊全機離陸。

一方海軍、こつそり造船された駆逐艦5隻、イージス艦3隻による
「オホーツク艦隊」は
敵艦隊を発見した。

「閣下！ 敵は揚陸艦3隻、駆逐艦2隻 巡洋艦2隻です！」

オホーツク艦隊司令官牛島清助

「うむ、船団の全兵力を駆使し敵を撃滅する」

「宗谷守備艦隊の3隻もこちらにむかつており、
宗谷303攻撃隊の航空機もこちらに向かっている、
やるなら今しかない、我が軍の底力を赤い敵に見せ付けてやろう」

陸軍は戦力が分散しすぎて稚内まで集結するのに時間がかかる、
ということはこので敵を倒さなかったら稚内守備隊は壊滅しまた
戦力が分散しきった陸軍はソ連軍の圧倒的物量の前に敗れてしまう。

今北海道の運命をかけた戦いが始まろうとしていた。

野寒布沖夜戦【前編】（後書き）

ご意見・ご感想ありましたらお気軽にどうぞ

あと戦争ものでグロテスクな表現あるかなと思っ
たらあまりないですね。

ちなみに作中に登場した荒鷲の歌とは日本の軍歌
です、軍歌というよりは戦時歌謡かと思いますが…

野寒布沖夜戦【後編】

25日0時40分、ソ連上陸部隊と護衛艦船を発見し日本海軍は攻撃に移った。

ソ連海軍上陸護衛艦隊司令官・ヴァシリイ・ロジエストヴェンスキ
ー少将

「しかし祖国はなんの為に日本と戦っているのだろうか」

このロジエストヴェンスキー少将はベテランの駆逐艦乗りであり日本が

好きな將軍である、その為理由も明かさず日本と戦っている祖国（ソ連）、

中国、北朝鮮、韓国に納得がいかないのであった。

参謀：ポリャコフ

「アメリカ軍も動き出した、勝手に政府転覆などおってロシアを滅ぼす気が国は」

軍人たちは嫌々戦っている様子であった

「私はこの国と戦いたくない、戦っても意味がないし最後の皇帝がおり

独特の文化を持ったこの日本という国を滅ぼしたくないのだ」

しかし任務を遂行しなければ処刑されてしまう、ロジエストヴェンスキー少将は

嫌々戦うのであった。

一方日本軍は -

「どういつ事だソ連軍は思ったほど反抗してこないぞ」

「気をつける、露助は恐ろしいからな」

「おい見ろ！ 攻撃隊だ！」

「がんばれよー！！」

宗谷303攻撃隊が到着したらしい。

麻衣にとって始めての対艦攻撃である。

「行くぞ！」

中林少佐の掛け声に続き麻衣も行動に移る。

空対艦ミサイルを発射し敵艦を攻撃する。

ソ連軍の反抗も激化してゆく…

1時間後揚陸艦1隻、巡洋艦1隻を撃沈した。

激しい攻撃を受けながらもソ連軍は上陸しようとする。

だが稚内には稚内守備隊が、空には宗谷303攻撃隊が、そして海にはオホーツク艦隊が。

守りは鉄壁であった。

一方ソ連軍は

ゴォォン！！

ロジェストヴェンスキー艦に魚雷が数発命中したようだ。

「閣下！ もうこの船は無理です！」

「うむ、総員退艦だ」

（2600年以上の歴史を持つ日本に、我々が勝てるわけないのだ、せいぜい言える事といえば祖国ロシアは滅びるだろう）

日本海軍の活躍により上陸できたソ連軍はわずかであった。
そのソ連軍も稚内守備隊の前にはかなわなかった。

ソ連側は揚陸艦2隻、巡洋艦1隻が沈没、揚陸艦1隻大破、駆逐艦1隻中破の損害を出た。

日本側は駆逐艦1隻沈没、駆逐艦2隻小破という程度ですんだ。
海戦は日本側の圧勝であった。

また攻撃隊も全機帰還、北海道は守られたのであった。

ロジェストヴェンスキー少将は捕虜にされた。

・
・
・

「…なに？ しらないとはホントかね？」

「本当です、私はなぜロシアが戦っているかさっぱりわからないのです」

ロジェストヴェンスキー少将は日本語が上手であつたためさくさくと会話が続く。

「…ただ私から言える事はひとつ、今ロシアは共産主義化した、ただでさえ金欠なんだ、あと数年もすれば金はなくなり戦争は続行できなくなるだろう」

しかし四国はなんの為に戦っているのだろうか？
これらの国の首脳は去年からまったく姿を見せない。
謎は深まるばかりである。

野寒布沖夜戦【後編】（後書き）

この物語は単なる架空戦記であり現実世界の出来事などとは一切関係ありません

ご意見・ご感想ありましたらお気軽にどうぞ

米を討て！ 欧亜同盟！

7月、戦争は3ヶ月目に突入した。

しかし…

7月3日、ベトナム社会主義共和国、ラオス人民民主共和国、キューバ共和国

大リビア・アラブ社会主義人民ジャマールヒーリーヤ国が日米へ宣戦布告。

すべてが謎だ、何故社会主義国が宣戦布告してきたのか？

元をたどればそれは北朝鮮にたどり着く、だが北朝鮮がこんなに影響力を

持つはずがない、だとすればどこか大きな国がやったに違いない。

中国か？ それともソ連共産党残党が作り上げた第二ソビエトか？

7月10日、アメリカが日本から突然の撤退、何故？

その後アメリカとの連絡がとれず…一体なにが？

それにはおそるべき陰謀があった。

今回の戦争…その原因は「アメリカ」だ

同盟国であるはずのアメリカが起こした戦いだ。
7月18日、撤退から一週間後：米大統領から手紙にとんでもない
ことが書いてあった。

「日本は今大日本帝國に戻りつつある、
あの我々アメリカ人はおろか世界を敵に回し戦ったあの悪の大日
本帝國に、

我々は正義と世界平和の為ロシア、中国、北朝鮮、そして
我々の配下である韓国を利用した。

これは邪悪なジャップを排除する正義の戦争でありこれらの四国
は我々に同意してくれた、
ジャップよ戦うなら戦えばいい、ただし日本は包囲されている、
日本は再び

我々に占領される以外道はないのだ……」

日本国首相大竹

「……」

「どういう事だこれは……!!」

「……わかりません……」

「奴らは味方じゃないのか!?!」

「今軍は28万まで兵士がいるがただでさえたりないってのに
アメリカまで介入してきやがったら日本は終わりじゃないか!!
!」

「すぐに徴兵制を施行しろ! 15歳から60歳までだ!!」

あと日本を防衛するために軍事費を増やせ!!

国民がガーガーうるさかろうが騒ぐ奴は非国民ってことにしてお

け！！！」

首相は完全に頭にきていると同時にあせっていた。
超大国アメリカまでもが敵ということを知り…

一方…

ドイツ大統領…

「アメリカはおかしい！ほかの国まで利用して
無実である日本を攻撃しようとしている！」

フランス大統領…

「いや！実質もう日本は攻撃されている、
ロシアとかもあいつらの言いなりになった」

イギリス首相

「しかもアメ公は反共のはずだ　なぜ共産主義に協力したのだ？」

ポーランド大統領

「日本だけではない、我々も危機に面している」

オーストリア大統領

「うむ、おそらく日本を倒したら次は欧州に来るだろう、
アメリカはきっと我々を邪魔だと思っているに違いない」

EU加盟国は皆米国及び日本と戦闘中の四国を警戒した。

それからしばらく…7月18日…米国参戦…劣勢に追い込まれた日
本…

・
・

・

だが日本に多少ばかりか光が見えた…21日

インドが武力介入、アメリカ、ソ連、中国、韓国、北朝鮮に宣戦布告。

インドに続き日本同様五国に包囲された台湾も日本と同盟を結び宣戦布告。

同じ頃南アジア、東アジア、東南アジア諸国のほとんどが五国に宣戦布告。

そして日本を中心とした「大東亜連合」が生まれる。

続きEU加盟国のすべてが五国に宣戦布告を行った。
共に行動をとるため欧亜軍事同盟を結んだ。

「首相、」

「うむ、少しは我が国にも光が見えたかもしれない」

しかし日本に味方ができたとはいえ…最悪の展開であることはまちがいない

これは「第三次世界大戦」である…

米を討て！ 欧亜同盟！（後書き）

中途半端ですが第一部完、

第2部「第三次世界大戦」をお楽しみに

（いつかは書きます）

以上シユールすぎる戦記でした。

あと知識が足りなく間違ってる所も沢山あり誠に
申し訳ございませんでしたorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1455h/>

第二次大東亜戦争1部「日本本土防衛！」

2010年10月13日11時53分発行